

儉綱繪佛師研究史料(稿)

平田, 寛

<https://doi.org/10.15017/2328551>

出版情報 : 哲學年報. 46, pp.39-72, 1987-02-28. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

僧綱繪佛師研究史料(稿)

平 田 寛

1 萬壽二年(一〇二五)九月二十二日、佛師入圓、治部省正廳の大元師、毘沙門天像の圖繪を支度。

〔小右記 萬壽二年九月二十二日〕

佛師入圓

亦佛師入圓進大元師畫繪支度、三躰并侍者天等新物米二百廿石、御衣者可用廣絹、可奉圖繪日時

吉平勘申、廿四日癸卯、時、件勘文并支度未奏者、示經内覽可奏之由、大元師今二躰、毗沙門

天一躰多破損、信源云、猶新可奉書者、尤可然事也、示可經案内之由、但支度頗高、可從關

白命由相示之、又云、先日入圓云、被任講師若寺司等、雖不給新物可畫進者、即申、關白、

被命云、太佳事也者。

1補 入圓の繪師系譜。

〔二中歴 第十三 佛師〕

繪 喜欣 入圓 如照入圓三郎 教禪入圓弟子 定禪

喜欣 入圓 如照
教禪 定禪

2 長曆四年（一〇四〇）九月廿六日、教禪佛師、藤原資房の四郎小童のため、五大尊小像を圖す。

〔春記 長曆四年九月廿六日〕

廿六日、戊寅、天晴、爲小童令圖五大尊像、小像付 護也、以所衆爲忠遣教禪佛師許了。

教禪佛師

3 長曆四年（一〇四〇）十月十九日、丹後講師政（救）圓、眞言院五大尊十二天像を圖繪す。

〔春記 長曆四年十月十九日〕

眞言院五大尊十二天像等、經年序朽損、仍以丹後講師政圓圖繪、以其功可令重任之由、可仰上卿。

丹後講師政圓

〔東寶記 第二〕

眞言院五大尊十二天像等、經年序朽損、仍以丹後講師救圓令圖繪、以其功可令重任之由、東寺長者等連署所申請也、爲興隆勅許畢云々。

丹後講師救圓

私云、眞言院五大尊十二天、長久元年、深覺僧正長者之時、救圓令圖之、大治二年、東寺寶藏回祿之時、所炎上、即此本事歟。

4 永承元年（一〇四六）五月十六日以前、佛師如照、小野僧正仁海の本により、仁王經曼荼羅を圖繪す。

仁海（一〇四六・五十六歿）

〔覺禪鈔 卷二十六仁王經法上〕

般若抄云、仁王經法有曼荼羅、昔 公家被修彼法之時、祖師曼荼羅寺上綱爲阿闍梨、申請佛師如照、令圖繪給本也。

佛師如照

佛師如照

佛子珍海

如照

珍海已講

佛師丹波講師教禪

〔正元元年仁王經法雜事〕

一 曼荼羅事

先師記云 報恩院御口云、小野僧正時被圖仁王經曼荼羅、增益曼荼羅也。佛師如照也。可懸東方歟。 權僧

正時改增益被圖息災曼荼羅。佛子珍海也。

〔弘鏡口説〕

仁王經ノ曼タラニ增益息災ノ兩種有之、最初ハ小野僧正仁海仰テ如照被圖之增益ノ曼タラ也、此經ノ七福即生之義ニ依テ歟、其後定海僧正ノ御代ニ彼ノ增益ノ曼タラヲ改テ息災ノ曼タラニ被圖、是又經ノ七難即滅ノ義ニ依ル歟、此特者筆者禪那院珍海已講也。

5 永承三年（一〇四八）二月二十二日、佛師丹波講師教禪ら、興福寺金堂法相柱を圖すため、

東大寺大佛殿の法相祖師影像を圖寫し、翌二十三日、大安寺塔下勝鬘夫人影像を寫す。

〔造興福寺記 永承三年二月二十二日〕

廿二日庚寅、天晴、午二點、安置佛像於南圓堂、同刻左少辨藤原朝臣資仲、引率佛師丹波講師教禪等、向東大寺大佛殿、令圖寫法相祖師影像、件影、在納經厨子等 是爲令圖法相柱也、金堂西

第一柱名也、寫了歸退、此日興福寺供養事、可准御齋會之由、被下宣旨云々、右大臣、召大外記中原朝臣長國、仰之者。

廿三日辛卯、天晴、已刻許、遣教禪於大安寺、令寫勝鬘夫人影像。在塔下。

6 治曆四年（一〇六八）三月二十八日、繪佛師教禪、法成寺御佛圖繪の賞として、法橋に叙

せられる。繪佛師僧綱の始となる。

〔初例抄 上〕

繪佛師任僧綱例

法橋教禪

佛師定禪

承保二年（一〇七五）

繪佛師教禪

法橋教禪、治曆四年三月廿八日敍、後冷泉院御所於法成寺被圖繪百廿一躰御佛賞也、繪佛師僧綱以之爲始、佛師定禪父也、承保二年三月死去。

〔僧綱補任 第四裏書 治曆四年〕

研學豎智尊〔三十八〕。大佛師法橋長勢月日敍法眼、願寺造佛賞。御。法橋覺助同日敍法眼、同賞。繪佛師教禪三月廿五日敍法橋、百體圖繪賞。公家御藥御祈誓、丈六御佛。

〔本朝世紀 第二十 治曆四年三月〕

十八日庚寅、左大臣（教通）以下參入、被定申來廿五日可被奉供養繪像御佛百廿躰事、依月來問御藥御祈也。

廿八日庚子、於法成寺、被供養百廿躰繪像御佛、構假屋、奉懸之、依御藥御祈也。

〔扶桑略記 第廿九 治曆四年三月〕

廿八日庚子、於法成寺供養百廿五躰丈六繪像尊容、院宮女（歡子）御家、并太政大臣左大臣（教通）合力致誠、其儀准御齋會、大赦天下。

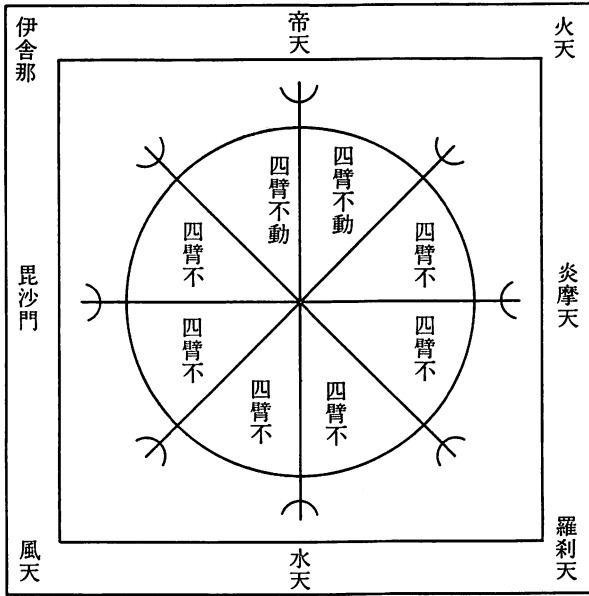
7 延久三年（一〇七二）七月十九日、佛師教禪法橋、大内裏安鎮法の曼茶羅の圖を檢す。

〔安鎮法日記 延久三年七月十九日〕

曼茶羅事

佛師教禪法橋

座主御支度云、中心四臂不動、廻八方天云々、而佛師所圖繪本支度相違也、謂八輻輪ノ上ニ中央四臂不動、次ハ輻輪ノ間ニ四臂不動ヲ書ケリ、其數八體也、次八方天ヲ書ケリ、即召佛師教禪法橋檢之、申云、不見御支度色、但先年宇治殿令修安鎮御修法給時圖樣ヲ畫也云々、座主可書改由雖被仰、及日晚影不能書改、仍致懸此樣ノ曼荼羅令勤修給了、院尊阿闍梨、被召問之處、申云、有此圖樣者ナリ、但阿闍梨被申云、中央二臂根本明王像、廻ニハ四臂不動八方天像云々。



教禪法橋畫図樣
如此明王色皆青
黒也

法橋教禪

8 承保二年（二〇七五）三月、繪佛師教禪死去す。

〔初例抄 上〕

法橋教禪（中略）、承保二年三月死去。

9 永保三年（二〇八三）十二月十五日、三條内裏の安鎮法に、法橋延（定、異本）源曼茶羅を圖繪し、法橋源順十八幡を圖繪す。

〔安鎮法日記 潤慶記〕

法橋延源
法橋源順

永保三年十二月十五日西乙、圓融房座主於三條内裏被勤修安鎮家國法之日記、於南殿修之、行事左衛門尉源盛長、先兼日下九方鎮處令造屋、又以法橋延源令圖繪、曼茶羅竝以法橋源順令圖繪十六幡。

〔阿婆縛抄 卷百二十 安鎮法日記集甲 大日本佛教全書所收〕

〔潤慶記 同文〕

〔阿婆縛抄 卷百二十二 安鎮法日記集丙 大日本佛教全書所收〕

〔ママ〕承保三年十二月十五日、〔中略〕法橋定源（下略）

承保三年（二〇七六）
法橋定源

10 寛治六年（二〇九二）の僧綱佛師四人。

〔僧綱補任 第五裏書 寛治六年〕

佛師

僧綱四人

11 嘉保元年（二〇九四）の僧綱佛師四人、うち延源繪佛師。

〔僧綱補任 第五裏書 嘉保元年〕

佛師

法橋兼慶 院助

圓勢 延源繪

延源

12 嘉保二年（二〇九五）の僧綱佛師四人、前年とおなじ。

〔僧綱補任 第五裏書 嘉保二年〕

佛師

法橋兼慶 院助

圓勢 延源

延源

13 嘉保二年（二〇九五）六月六日、丹後講師明舜、閑院の安鎮法曼荼羅を繪し、十六幡を畫す。

〔安鎮法日記 嘉保二年鎮日記 閑院 南院房座主仁覺〕

丹後講師明舜

六月六（九 異本）日癸酉、被始御修法、自明日入土用也、雖師說不忌之、任世俗法者猶可避之、仍今日受地、堀穴造借屋了。曼荼羅中心四臂不動、第二八方天也、佛師丹後講師明舜、從御房賜指南奉繪也。十六幡、白色幡八流、四臂明王畫之、八色幡八方天王畫之。

〔阿婆縛抄 卷百二十二 嘉保二年鎮日記〕

六月九日酉癸、被始御修法。(中略)曼荼羅中心四臂不動、第二八方天也、佛師丹後講師明舜、從御房賜指圖奉繪也。十六幡白色幡八流四臂明王畫之、色幡八方天王畫之。

14 嘉保三年(一〇九六)六月二日。僧綱繪佛師延源歿。

〔僧綱補任 第五裏書 嘉保三年〕

佛師

法橋院助 兼慶

圓勢 延源六月二日卒

延源

15 康和三年(一一〇一)三月二十九日、繪佛師明俊、鳥羽新御堂供養の賞として法眼に敍せらる。

〔僧綱補任 第五裏書 康和三年〕

佛師

法橋院助 兼慶

圓勢三月二十九日敍法眼
鳥羽新御堂供養造佛賞 明俊同日敍法眼
同賞、柱繪賞

法眼明俊

16 康和五年(一一〇三)七月二十五日、繪佛師範舜、興福寺供養の賞として、法橋に敍せらる。

〔本朝世紀 康和五年〕

範舜繪佛師

繪佛師範春

範俊法橋

明俊

範俊

七月廿五日 興福寺供養賞

法印範俊興福寺別當 權少僧都眞願別當覺信讓

法橋頼助大佛師 範舜繪佛師

〔僧網補任 第五裏書 康和五年〕

康和五年七月廿五日 興福寺供養

大佛師頼助同日敘法橋
佛修理賞 繪佛師範春同日敘法橋
柱繪賞

〔七大寺日記〕

金堂 中尊釋迦丈六覺助造、柱繪等範俊法橋筆无指事。

17 長治元年（一一〇四）の僧網佛師六人、うち繪佛師に明俊、範俊の名あり。

〔僧網補任 第五裏書 長治元年〕

佛師

法印圓勢 法橋院助

兼慶 明俊繪

頼助 範俊

18 長治二年（一一〇五）十月十六日、繪佛師範順（俊）、萬體愛染王を渡しおわる。

〔殿曆 長治二年十月六日〕

今夜余禮拜廿一遍、小呪三千遍、此間御寺有念佛、去七月奉始佛、愛染王半丈六御首佛師院

佛師範順

助法橋渡奉、奉禮拜返奉、今朝佛師範順繪佛、萬體愛染王渡奉之、余奉之返渡奉了、去七月比始奉。

19 長治二年（一一〇五）の僧綱佛師六人、うち繪佛師に明俊、範春の名あり。

〔僧綱補任 第五裏書 長治二年〕

佛師

法印圓勢 法橋院助

兼慶 明俊繪

頼助 範春繪

明俊

範春

20 長治二年（一一〇五）十二月十九日、繪佛師定助、尊勝寺新堂供養の賞として、法橋に敘せらる。

〔中右記 長治二年十二月十九日〕

十九日壬午 天晴、今日尊勝寺新堂供養也阿彌陀堂、准提堂、法華堂。（中略）

同以供養、了後被仰勸賞、

木佛師院助法眼法橋、木佛師長圓法橋、繪佛師定助法橋

繪佛師定助法橋

21 永久二年（一一一四）十一月二十九日、法勝寺新阿彌陀堂供養の賞として、繪佛師明舜（順）

および長（貞）助、法橋にあげらる。

明舜
長助

繪佛師法橋明俊・長助

權佛師明順・貞助
屏繪師賴俊

佛師明順・長助

〔殿曆 永久二年十一月二十九日〕

今日新阿彌陀堂供養也、(中略) 此間有賞事、院司爲房、皇后宮大進、前齋院尹通、已上一階、
工(清原)國貞一階、備前守(平)正盛、重任、佛師、法印圓勢次郎、惟信、圓勢讓、明舜、長助已上追可
〔大記 蓮華藏院供養〕

次内大臣奉勅、被仰下勸賞、

正三位藤原爲房院別、正四位下同惟信皇后宮、正五位下同尹通前齋院、法橋上人賢圓大佛師、圓勢讓

備前守平正盛被下重任宣旨造進、修理職大工國定、木佛師法橋長圓、繪佛師法橋明俊并長助
等、追可申請之由被宣下。

〔白川御堂供養記 雅兼記〕

内大臣仰勸賞事

大藏卿爲房卿敘正三位院別、皇后宮大進惟信敘正(四)位下、安藝守尹通敘正五位下齋院、佛

師長圓敘法橋、工國貞敘從五位上、權佛師明順、貞助、正盛重任、屏繪師賴(俊) 追申請可
被賞云々。

〔中右記 永久二年十一月二十九日〕

今日白河新御願寺供養也、(中略)

被仰下勸賞、備前守正盛重任、正三位爲房院司正四位下惟信、皇后宮、正五位下尹通、前齋、宮司
從五位上國貞、大、法橋忠圓、圓勢讓、佛師明順、長圓、長助追加隨申請

法橋明順繪佛師

22 元永元年（一一一八）九月十四日、法橋明順、八十餘歳にて歿す。

〔中右記 元永元年九月十四日〕

或人云、法橋明順一日病胸、俄入滅、年八十餘、是繪佛師、巧畫圖。

23 大治四年（一二二九）十二月六日、繪佛師頼如（助）、盜難の東大寺五獅子如意を尋ね取出

し、東大寺に返送す。

〔長秋記 大治四年十二月六日〕

三條殿別當談云、去日追捕間、當講惠曉房所安置之東大寺聖寶僧正五獅子如意、爲放免被盜取給、繪佛師頼如、有尋取出被返送本寺、獅子文雖被破如元打付云々。

繪佛師頼如

23補 筑前講師頼助

〔古畫備考 卷十四 頼源の條〕

法印頼源筑前頼助子、壽永二年二月廿四日、腫物卒。

法印頼源
筑前頼助

24 大治五年（一二三〇）十月二十五日、繪佛師明源、法金剛院の勸賞において、法橋に敘せらる。

〔中右記 大治五年十月二十五日〕

廿五日甲午 天晴、仁和寺女院御願寺供養法金剛院。（中略）

有勸賞

法橋明源

從三位播磨守基隆御堂造、從五位下國末、權律師範覺導師、法橋院覺佛師、法橋明源繪佛師賞。

25 天承元年（一一三二）七月八日、鳥羽成菩提院阿彌陀堂に、佛師知（智）順九品曼荼羅繪像を、頼俊補陀羅山をえがく。

〔長秋記 天承元年七月八日〕

八日壬寅 晴、鳥羽家跡御堂供養、件御堂、（中略）七間四面孫廂御堂也、中央一間有柱繪有螺鈿、佛壇安置半丈六彌陀、等身二菩薩像、佛後圖九品曼荼羅繪像、佛師知順、其北面圖

補陀羅山、頼俊筆。

佛師知順
頼俊

26 天承元年（一一三二）、僧綱佛師八人、うち明源繪佛師。

〔僧綱補任 第六裏書 天承元年〕

佛師

法印圓勢 法眼長圓

賢圓 法橋康助

尋意經師 長順

明源繪 院覺

明源

27 長承二年（一一三三）、僧綱佛師八人、うち明源繪佛師。

〔僧綱補任 第六裏書 長承二年〕

佛師

法印圓勢 長圓清水寺別當

法眼賢圓 長順

院覺 法橋康助

尋意經師 明源繪

明源

28 長承三年（一一三四）、僧綱佛師八人、うち明源繪佛師。

〔僧綱補任 第六裏書 長承三年〕

佛師

法印圓勢壬十二月廿一日卒 長圓清水寺別當

法眼賢圓 長順

院覺 法橋康助

尋意經師、壬十二月十二日卒 明源繪

明源

29 保延元年（一一三五）五月五日より六月、九月にかけ、繪佛師知（智）順、應元（現）とと

もに、鳥羽勝光明院の繪事をつとむ。

〔長秋記 保延元年五月五日〕

鳥羽御堂飛天之舞菩薩二軀、加採色飜等、經御覽、一體應元、一體知順、有御感、殘佛可充兩師之由、

應元 知順

以帥行被仰。

〔同 六月二十日〕

鳥羽御堂二階上層、可奉居四佛、可居何佛哉由、有上皇御氣色者、示云、本佛已阿彌陀也、被造四親近菩薩矣、有便宜歟、下官申云、謂四親近何々哉、示給云、世俗所云、觀音、勢至、地藏、龍樹也云々、件四菩薩并柱繪印相、可召進繪佛師知順令圖、可下給由令申畢。

〔同 六月二十一日〕

召繪佛師知順、可參仁和寺之由、仰含了、御佛印相沙汰也。(中略) 扉繪、誰人可勤仕哉、仰云、覺猷大僧正、稱老屈者、可召仰賴俊。

〔同 九月五日〕

天明間過鳥羽殿、見御堂、應源智順柱繪相違事見合處、無別相違、付應現繪樣可出之由、仰付國司行事了。

〔同 九月二十五日〕

見御堂知順應元繪相違、知順雖蒙公定全無勝事、人々稱善起高馬儀也。

知順
應元

應現
智順

繪佛師知順

繪佛師知順

30 保延元年(一二三五)の僧綱佛師四人、うち明源繪佛師。

〔僧綱補仁 第六裏書 保延元年〕

佛師

法印長圓清水寺別當

法眼賢圓

法橋康助 明源繪

31 保延二年（一二三六）の僧綱佛師六人、うち明源繪佛師。

〔僧綱補任 第六裏書 保延二年〕

佛師

法印長圓清水寺別當

法眼賢圓 院覺

法橋康助 明源繪

忠伊 十月十五日敍、法金剛院御塔
供養賞、金泥一切經書寫

32 保延二年（一二三六）の繪佛師法印一人、法橋四人ともいう。

〔僧綱補任抄出 下 保延二年〕

佛師法眼七人、法橋四人。繪師法印一人、法橋四人。經師法橋一人。

33 保延三年（一二三七）の僧綱佛師六人、うち明源繪佛師。

〔僧綱補任 第六裏書 保延三年〕

佛師

法印長圓清水寺別當 法眼賢圓

院覺 法橋康助

明源

明源繪

忠伊書經師

34 保延五年（一一三九）の僧綱佛師九人、うち明源繪佛師。

〔僧綱補任 第六裏書 保延五年〕

佛師

法印長圓 法眼賢圓

院覺 法橋康助

明源繪 忠伊書經師

院朝 三月日敍、法金剛院御塔供養造佛賞
法眼院覺讓

圓信 十月廿六日敍、圓勝寺供養造佛賞
法印長圓子

忠圓同日敍、同賞、法眼賢圓子

35 保延六年（一一四〇）の僧綱佛師六人、うち明源繪佛師。

〔僧綱補任 第六裏書 保延六年〕

佛師

法印長圓 法眼賢圓 院覺

法橋康助 十月廿九日轉法眼 明源繪 忠伊書經師
院春御塔造佛賞

36 保延七年（一一四一）の僧綱佛師九人、うち明源繪佛師。

佛師

法印長圓 賢圓

法眼院覺 康助

法橋明源繪 忠伊書經師

院朝 圓信

忠圓

明源

佛師賴源

37 永治二年（一一四二）三月七日、佛師賴源、藤原忠通の發願により、葉衣觀音を圖繪す。

〔阿婆縛抄 卷九十三 葉衣鎮〕

被奉圖繪葉衣觀音佛師、御衣一鋪半也、長三尺、廣一尺五寸。

38 康治元年（一一四二）七月二十八日、法橋智順、越後國二田社に成功。

〔右衛門督藤原家成下文案 平安遺文二四七五〕

〔下 越後國□□所

補任二口社神主事

藤井重慶

右件社司、依法橋智順之成功、以彼人可令執行社務之狀、所仰如件、故下

康治元年七月廿八日

右衛門督藤原朝臣（家成）在判

法橋智順

二田社

39 康治二年（一一四三）八月六日、白河金剛勝院供養の賞として、繪佛師智順法眼位にあげらる。

〔本朝世紀 第二 康治二年八月六日〕

今日、皇后宮（美福門院）被供養新造御堂、押小路末、川原 法皇同渡御、其儀准御齋會、（中略）

又被仰勸賞事。

正五位下藤惟方造作國司越前守

法眼智順繪佛師

法眼智順繪佛師

40 久安二年（一一四六）八月十三日、繪佛師智順法眼之子、長圓の彩色せる吉祥天を開眼。

〔醍醐雜事記 卷七〕

久安二年寅

正月廿日寅 吉祥天爲奉造、直奉送佛師賴嚴之許

二月五日辰 吉祥天奉迎之

三月廿二日卯 始奉塗吉祥天、塗師近江講師也

四月廿七日寅 吉祥天彩色始之、繪佛師長圓也

八月三日庚子 吉祥天奉迎之

同十三日庚戌 吉祥天爲令開眼、于佛師奉隨身出京、繪佛師智順法眼之子也

繪佛師長圓

繪佛師智順法眼之子

41 久安五年（一一四九）三月二十日、延勝寺供養の賞として、繪佛師頼助の讓をうけ、頼源法橋に叙せられる。

〔本朝世紀 久安五年三月二十日〕

法眼勝圓 佛師長圓讓、長圓孫也、法橋圓春 佛師賢圓讓、賢圓弟子也、頼源頼助 繪佛師頼助讓、頼源頼助子也。

繪佛師頼助
法橋頼源

42 久安五年（一一四九）十月二十五日、智順法眼、叙子内親王ならびに北政所周忌法事料として、それぞれに兩界曼陀羅をえがく。

〔臺記別記 久安五年十月二十五日〕

今日、故姫宮并北政所周闕御法事正日等料、於女院被奉始御佛經

姫宮御法事料、來月十一日

兩界曼陀羅各一鋪、智順法眼、御衣絹一丈、五尺許、料物千五百足、

等身大日像一杼、佛師賢圓法印、

金泥法華經一部、經師勝圓、

已上、各於佛經師住房奉始之、御衣木絹等、自院差副行事主典代遣之、

御經作料物

北政所御正日料、十二月十四日、

兩界曼陀羅、佛師等同前

等身阿彌陀佛一杼、佛師源尊、

智順法眼

智順法眼

金泥法華經一部 經師
永義、

已上同前、此外御經追可始之、

下官仕候宇治殿之間、兼日被沙汰、下知納殿并行事主典代、後式等令始沙汰之、

〔兵範記 同年同月同日〕

記事は臺記別記に同じ。43参照。

43 久安五年（一一四九）十一月十一日の姫宮御法事料および十二月十四日の北政所御正日料

として、法眼智順の兩界曼荼羅の料物各千五百疋を用意。

〔兵範記 久安五年十月二十五日〕

姫宮御法事料來月十一日

兩界曼荼羅各一鋪 智順法眼、御衣絹一丈五尺許
料物千五百疋

等身大日像一體佛師賢圓法印

金泥法華經一部經師勝圓

已上各於佛經師住房奉始之、御衣木絹等自院差副行事主典代遣之。

北政所御正日料十二月十四日

兩界曼陀羅佛師等同前

等身阿彌陀佛一體佛師源尊

金泥法華經一部經師永義

已上同前、此外御經追可始之。

44 仁平元年（一一五二）七月二十五日、宇治小松殿新御堂天蓋の繪様のため、智順を召さんとす。

〔左兵衛尉仲行書狀 陽明文庫本行親記長曆元年卷裏文書 平安遺文四七二九〕

〔平等院本堂中尊阿彌陀堂小松殿新御堂天蓋繪様可令寫進上之由、謹以承候了、但宇治可然繪師不候、如智順可召下給候歟、仲行恐々謹言

七月廿五日 左兵衛尉仲行

智順

45 仁平二年（一一五三）四月九日、法皇五十賀の兩界曼茶羅御衣絹加持に、佛師智順奉仕す。

〔兵範記 仁平二年四月九日〕

今日於高陽院被奉始法皇御賀御佛經等、（中略）安兩界御衣絹、紫色綾付張形各二幅、長四尺、兼給佛師裁縫付張形也、

佛師智順

時刻申事由、出御歟、相源僧都着座、發願啓白了、執灑水散杖、圖繪御衣絹、次佛師智順着絹淨衣、參進奉始之、以水圖之、先始胎藏、次金剛界、依僧都説也、次撤御衣絹筵了、（中略）御佛料金三兩下給智順。

46 同年（一一五二）六月十日、法皇五十賀の兩界曼茶羅御衣絹をふたたび加持し、佛師智順

奉仕す。

〔兵範記 仁平二年六月十日〕

依女院仰、相具佛師智順、向山座主白川房大僧正行玄、奉始一院御賀料、兩界曼陀羅、御衣絹、

佛師智順

紫色綾、兼賜智順、付張形令隨身、淨衣同給之、寢殿東南庇敷筵一枚、其上安御衣絹二鋪、

法眼智順

其前立小机一脚、供花瓶一口阿伽花水等器各一口、火舎灑水器、立磬臺敷半帖如例、座主被
出會、智順着淨衣進候、次座主發願灑水、次依命奉始、先胎藏、次金剛界云々、次佛師撤御
佛退出、座主被令女院御返事、即歸參申事由了、

件兩界、去四月九日於女院御所、金泥御經等相共被奉始之、而同日下旬、智順住房燒亡次、
不能取出燒失了、仍今日更奉始也、重不勘日時、只尋問吉日被行也、且是入道殿仰也、泥料
金銀并書料、重被下行了。

47 同年(一一五三)八月二十八日、高陽院白河御堂において、鳥羽法皇五十賀の儀に、法眼
智順圖せし金泥兩界曼荼羅を懸け奉る。

〔兵範記 仁平二年八月二十八日〕

天陰、今日禪定大相國(忠美)、於高陽院白河御堂、被奉賀(鳥羽)法皇五十御算、其儀、九
體丈六供大佛供香花燈明如去年供養日、其中尊前母屋際、敷赤地唐錦地鋪、其上立螺鈿地磚
佛臺一脚、母屋柱巡立之、佛壇與佛臺之間有道、佛臺弘七尺餘、有蓋張青地錦、棟上伏金銅瓦形居寶
珠、其左右居金銅鳳形各一翼、檐間懸金銅伏輪、居同寶珠、蓋裏張青薄物付金銅唐草文、又
有繡、四面付羅網四角懸寶帳、其中立泥繪透障子、張骨薄物、押黃地唐錦緣、奉懸金泥兩界曼荼羅各一鋪、御衣絹用紫色綾、法眼智順奉
圖文、以漆書文、以紫色薄物付御佛、裏有金銀泥下繪、螺
鈿地磚軸一筋、懸兩界二鋪、佛臺障子面打臂金三、奉懸也。
圖之、差黃地唐錦緣、其上鏡

48 仁平三年(一一五三)六月八日、法眼智順、宇治經藏の文殊の獅子木像を圖寫す。

〔宇槐記抄 仁平三年六月八日〕

禪閣（賴長） 參御平等院余不、開經藏、圖寫文殊所乘之木像師子、法眼智順執筆、是院新造御堂文殊師子、被摸經藏師子之故也

49 仁平四年（一一五四）八月九日、鳥羽金剛心院供養の賞として、繪佛師智順、法印にあげらる。

〔兵範記 仁平四年八月九日〕

鳥羽金剛心院供養也、（中略）

晩頭被仰勸賞

正五位下藤原隆能屏繪賞

從五位上高階泰盛釋迦堂行事入道殿被申

法印智順両方繪佛師

法橋院尊九體佛師賢圓識 康朝釋迦堂佛師康助識

工二人 則恒、時次、各一階

造國司 播磨重任、讃岐遷任、顯親朝臣、成親等賞、追可依請

50 仁平四年（一一五四）八月九日以前、法眼智順、御護小佛の制作を承る。

〔智順書狀 京都大學所藏兵範記卷裏文書、仁平二年二月紙背〕

「御護小佛事、委以承候、

法眼智順

如仰旨、來廿日比可奉出
候歟、於御寺、更々不可致疎
略候、恐々謹言

乃刻 法眼智順

越中書狀返

」

藏人所佛師頼助

51 久壽二年（一一五五）六月十四日、藏人所佛師頼助、尊星法の本尊を圖繪す。

〔山槐記 久壽二年六月十四日〕

被始行尊星行法、阿闍梨法印覺忠、於本壇□被修之、壇具伯耆國成功内加檢察送遣了、御鏡御帳也、御本尊新被圖繪、召付藏人所佛師頼助歟、□國令請取料物御衣絹等。

52 久壽二年（一一五五）八月十五日、法橋頼源弟子らをひきいて、紫野知足院に等身地藏菩薩像を一日にて圖繪す。

〔兵範記 久壽二年八月十五日〕

立佛臺、奉懸御等身地藏菩薩像一鋪、法橋頼源率弟子等、於西塔下、自今朝終一日功也、爲速悉也

法橋頼源

53 保元三年（一一五八）七月二十五日、佛師頼源法橋、高倉殿の葉衣法に、本尊等身形像を

圖す。

〔兵範記 保元三年七月二十五日〕

廿五日壬午、早旦、參高倉殿、殿下渡御、今日被始行御祈等、
葉衣法、權大僧都暹覺率番僧十二口、於寢殿南面勤行之、
本尊等身形像一鋪、佛師賴源法橋相具御衣絹、行向阿闍梨房、隨彼命奉圖。

54 長寬元年（一一六三）六月、法印智順、越後國二田社の押妨を停止せられんことを請う。

〔法印和尚位智順解 陽明文庫所藏兵範記卷裏文書 平安遺文三三〇六〕

〔法印和尚位智順解 申請 殿下 政所裁事

請被特蒙 鴻恩、且依院宣、具依殿下政所仰、且任國司廳宣、被裁許年來所領越後國二
田社、不慮外爲覺智僧被令押妨子細愁（状）

副進

依 院宣國司廳宣案一通

同 外題案一通

右、智順謹檢案内、件社者越後國藤中納言家成卿令知行之□□、依美福門（院）御堂金剛
勝院綵繪之功、以 故鳥羽院宣下、永所補□□、國司廳宣并外題等旁以明白也、其後至于
當任二十餘年之間、致□□無相違所令領知也、而今年始、覺智僧都俄被押妨之條、未知其
（理）、就中 故鳥羽院之御時、新立庄園寺社等皆拘新制畢、何況依革□寺成功、於今補
畢、抑智順從年來當初、令勤仕殿下御官仕、年序稍久焉、而中絕久不蒙 御命、非違背仰
旨、然者積功累德、盡默止耶、可□垂 御哀憐給者也、就中苟仕五代之聖朝、已及八旬之
暮齡、加之所帶綱位者、當時之榮耀也、所賜葺祠者、永代之恩賞也、社若被停廢□、露命

法印和尚位智順

難存者歟、愁吟之甚、泣仰 哀憐矣、望請恩裁、且依院宣、且殿下之御裁許、被停止覺智之非道之妨者、彌仰 憲法之嚴、仍勒事狀、謹解

長寛元年六月 日

法印和尚位智順謹解

55 長寛二年（一一六四）の僧綱佛師十七人、うち繪佛師法印一人、法橋四人。

〔僧綱補任抄出 下 長寛二年〕

佛師法眼七人、法橋四人。繪師法印一人、法橋四人、經師法橋一人。

56 仁安元年（一一六六）八月十六日、法印智順、五鋪の佛畫の完成を報ず。

〔智順書狀 京都大學所藏兵範記卷裏文書、仁安二年正月および仁平二年六月紙背〕

〔五鋪御佛如仰皆奉

浴出候者也、弘此鐵尺之

二尺三寸所候也、兼又次第

事委以承候了、雖出來

御、且可奉渡候者也、恐々

謹言

法印智順

八月十六日 法印智順奉

〔兵範記 仁安元年九月八日〕

下官勤行（基實公追善）御佛事

等身阿彌陀五佛阿彌陀爲中尊、地藏、龍樹、觀音、勢至也、綵色佛壇五脚、在金銅、螺鈿花机五前、金銅阿伽器五前。

57 仁安元年（一一六六）九月十五日、頼源法橋圖せる兩界曼荼羅を、藤原基實の法事に懸く。

〔兵範記 仁安元年九月十五日〕

母屋中央頗寄西北、立黒漆平文佛臺、奉懸兩界曼荼羅各一鋪、佛像圖之、在錦線、頼源法橋圖之、胎藏西金剛東、是天台檢敷。

頼源法橋

58 同年（一一六六）九月二十四日、藤原基實の歿後の沙汰として、智順法印および頼源法橋

それぞれに佛畫の制作を課せらる。

〔兵範記 仁安元年九月二十四日〕

廿四日甲子 始（基實）歿後沙汰

一幅半御佛六鋪、仰智順法印了、

毎日供養料一尺阿彌陀佛五十體、二幅御衣、絹八尺、仰頼源法橋了、法華經八部仰珍順了。

智順法印

頼源法橋

59 仁安二年（一一六七）五月二十二日、最勝講に、法印智順圖繪の釋迦像を奉懸す。

〔兵範記 仁安二年五月二十二日〕

廿二日己未八專 天晴、最勝講始也、（中略）

御帳中奉懸新圖繪釋迦像一鋪、吉祥天、毘沙門爲脇士、差錦線、件御佛、依代始、仰納殿令沙汰調、支用功物、法印智順奉圖之、 金泥最勝王經

法印智順

一部同新寫、左秩寶螺細管并花足等、同納殿新調之、御經同前、於
當者雖可用古物、前帝御時管失了云々、仍新調云々、墨字同經一部、同新書寫。

60 仁安三年（一一六八）七月四日、繪師法橋頼源、繪師能登權守宗茂とともに大嘗會の繪
様を畫く。

〔兵範記 仁安三年七月四日〕

繪師法橋頼源、畫御調度變繪之様、以代々本様加今案議定也、繪師能登權守宗茂、畫師子
形繪様、又副御調度様、可畫之由、下知畢。

61 治承元年（一一七七）九月十日、佛師頼源法眼、丈六正觀音繪像をえがく。

〔玉葉 治承元年九月十日〕

此日、皆爲（覺忠）僧正、供養一日、丈六正觀音繪像、導師覺知法印、佛師頼源法眼也。

佛師頼源法眼

62 同年（一一七七）十二月十七日、蓮華王院五重塔の供養にあたり、繪師頼源の讓により

頼全法橋位にあげらる。

〔玉葉 治承元年十二月十七日〕

此日、太上法皇、蓮華王院内、五重之塔婆、設一日之齋會、當于手堂、異、立之依永保三年法勝寺九
重塔供養例、所被行也、（中略）法眼寬敏上座靜、賢讓、法橋成覺別當覺、讓、康慶佛師、頼全繪佛師、頼源讓
已上。

頼全法橋
繪佛師頼源

63 治承二年（一一七八）正月十四日、佛師頼源、九條兼實のために、三井寺御幸供養の繪様を書く。

〔玉葉 治承元年正月十四日〕

佛師頼源

召佛師頼源、令書繪様、中將供奉御幸之間事也。

64 同年（一一七八）六月二十八日、佛師法眼頼源小佛師らをひきいて、中宮徳子の懷妊法事

に、訶梨帝母像および十五童子供本尊を圖繪す。

〔山槐記 治承二年六月二十八日〕

中宮 徳子、御年廿四、六波羅入道前太政大臣、御懷妊、當五ヶ月、仍有御着帶事、（中略）

自今日被始行御祈等

本宮沙汰事

宮主御祓

陰陽師御祓

見上、見右

呵梨底母供

雜事内大臣沙汰

十五童子供

雜事女房彼御方、（二品弟）沙汰

佛師法眼頼源

已上二壇大僧正禎喜法務、東寺長者、獻支度、件二體、佛師法眼頼源相率小佛師等、於大僧正壇所也、三條北、高倉東、今日之中奉圖繪之、頼源兼日進支度、御衣絹以下用途爲二品沙汰

被下行事受領功之内也。

法眼頼源

筑前頼助

法印頼源

法橋頼圓
法橋頼與

65 養和二年（一一八二）三月三日、法眼頼源、等身毘沙門天王繪像を書く。

〔養和二年記 三月三日の條〕

等身繪像毘沙門、同被供養了、導師淡路公忠主、法眼頼源奉書天王也。

66 壽永二年（一一八三）二月二十四日、法印頼源、腫物によりて歿す。

〔僧網補任 壽永二年 古畫備考卷十四所引〕

法印頼源筑前頼助子、壽永二年二月廿四日、腫物卒。

67 壽永三年（一一八四）、頼源の子頼圓および頼與、繪佛師法橋。

〔僧網補任殘闕 壽永三年〕

佛師

法印

木 院尊院覺弟子

法眼

木 明圓三條忠圓子

法橋

繪 頼圓頼源一男
繪 頼與同二男

木 院實信尊一男
木 院尚院朝子

木 康慶肥前
木 朝國明圓子

寛圓明圓子

經師

圓嚴和泉

良巖但馬

圓嚴(?)

67補 頼圓、頼與、頼増および頼成

〔僧綱補任 壽永二年 古畫備考卷十四所引〕

頼圓繪佛師、敍法眼、頼源子

頼與繪佛師、頼源二男、敍法眼

頼増繪佛師、其子頼成、繼家業

頼成繪佛師、頼増子、敍法橋

〔僧綱補任殘闕 元曆二年〕

佛師

法印

院尊院覺

法眼

明園忠圓

法橋

頼(?)圓繪

頼與頼源二男繪

頼圓法橋
頼與法橋

頼圓
頼與
頼増
頼成
元曆二年 (一一八五)

眞乘房勝賀

院實院尊木

院尚院期木

昭前小仏師

康慶木

朝圓明圓一男木

寬圓明圓二男木

經師

法橋

和泉圓嚴

俱尾良嚴

68 同年（一一八四）、宅間爲基すなわち眞乘房勝賀、法橋に敍せらる。

〔僧綱補任殘闕 壽永三年法橋〕

眞乘房勝賀 元八條先生、出家及
里勝賀十年、宅間冠者爲遠子
俗名爲基

僧綱繪師研究 參考主要論文

- | | | | |
|------------|--------------------------------------------|----------------------------|---------------|
| 奈良帝室博物館 | 『日本肖像畫圖錄』 | 便利堂 | 一九三七年十二月 |
| 秋山光 和 | 源氏物語繪卷の構成と技法 | 美術研究 | 一七四號 一九五四年 三月 |
| 水野 敬三郎 | 繪師草紙―智順の嘆き | Museum | 一四三號 一九六三年 二月 |
| 水野 敬三郎 | 智順補遺 | Museum | 一四五號 一九六三年 四月 |
| 柳澤 孝 | 大和永久寺眞言堂障子繪と
藤田本密教兩部大經感得圖
―その制作年代と作家 | 美術研究 | 二二四號 一九六三年 三月 |
| 錦織 亮介 | 御筆本仁王經五方諸尊圖考 | 哲學年報 | 三三輯 一九七四年 三月 |
| 平田 寛 | 繪師 僧となる | 美學 | 一〇六號 一九七六年 九月 |
| 平田 寛 | 頼派繪師の消長 | 哲學年報 | 四一輯 一九八二年 三月 |
| 平田 寛 | 繪師の系譜 | 日本の美術二〇六號
『鎌倉繪畫』(至文堂)所收 | 一九八三年 七月 |
| 東京國立文化財研究所 | 『日本繪畫史年記資料集成
十世紀―十四世紀』 | 東京國立文化財研究所 | 一九八四年 三月 |